
ブラザークエスト その2

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザークエスト その2

【Nコード】

N2937M

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

生き別れた兄を探す弟の物語。

なぜ兄は消息を絶ったのか？

今どこで何をしているのか？

わずかな情報を元に、北条アキラはゆく…。

作：青木弘樹

ある女性が現れた。年は30歳前後だろうか。なかなか美人だった。

「もう10万近くツケがたまってるのよ。いい加減払いなさい」
女性は男（北条ナオト）を見ていた。

「あ、あの…」

俺は女性に話しかけた。

「なによ？あんたサラ金の追い込みでしょ？けどこっちが先だからね」

「い、いえ、俺はサラ金の追い込みじゃありません」

「じゃあ、なんなのよ？」

「あの…実は…」

俺は女性に事情を話した。

「ふうん…そうなんだ。けど人違いだったんでしょ？ならもう帰ったら？」

「え？まあ…そうですね」

「ちよ、ちよっと待ってくれよ。ここで会ったのも何かの縁だ？お金貸してくれないか？」

「はあ？」

俺は驚いた。

「ごうしよう。まゆみの店には俺のボトルがあるんだ。あんたにそれやるからさ、な？」

「ボトル？あの…まゆみさん…って、ホステスさんなんですか？」

「そうよ。っていうか、私のお店なの。このバカ・ナオトは常連なんだけど、ツケがたまってるのよ。いい加減払ってもらわないとこ

「つちも商売にならないわ」

「…」

「ナオトは言葉も出なかった。」

「…」

「俺はしばらく考えた。」

「分かりました。じゃあ、とりあえず2万だけ貸しますよ」

「え！？マジで!?!」

「ナオトは驚いていた。まゆみも驚いていた。」

「あ、あんた神様だ。恩にきるよ。ありがとう」

「ナオトは喜んでいた。俺は財布から2万を取り出した。」

「ありがとう」

「ナオトがお金を受け取るうとしたとき、すかさず、まゆみがお金を奪い取った。」

「なにしてんのよナオト、これは私のものですよ」

「あ、まあ、そうかな…」

「今日のところはこれで許してあげるけど、また来るからね」

「わ、分かったよ。怒るなよ。でも怒った顔も美人だぜ、へへ…」

「うるさいわよ、まったく…。じゃあねナオト。それで…えっと…」

「俺は北条アキラといいます」

「アキラ君ね。じゃあ、あのボトルはあなたのものだから、いつでも飲みに来てね」

「はい」

「まゆみはアキラには笑顔だった。」

「じゃあね、ナオト」

「ナオトには冷たい視線だった。」

「まゆみは近くに停めてあった赤いスポーツカーに乗り込み帰って行った。」

「さて…」

「な、なあアキラ君…どうしてお金貸してくれたんだ？赤の他人の俺に…」

「え？まあ…困ったときはお互い様って事で…」

「ありがとう…本当にありがとう！絶対返すからね」

「ええ…」

しかし俺はお金はあげたつもりだった。この手の人間は結局お金を返さない。とりあえずお互いの連絡先と、さっきの女性のお店の場所を聞き、俺は帰って行った。

しかしなぜ俺はお金を貸したと思う？答えは簡単。さっきの女性が美人だったからだ。出来れば仲良くなりたいと思っていた。俺は年上が好きなんだ。

そのうち飲みに行こう。お酒は好きじゃないが飲めないわけじゃない。人生にはちよっとした楽しみも必要なのさ。

数日後。俺は例の女性、名前は佐野まゆみというらしいが、彼女の店に行くことにした。

夜。俺は店の前に着いた。少しだけ緊張していた。すでに連絡はしてあったので、客がいつぱいで追い返されるということはないだろう。

「いらっしやいませ〜！」

店員が威勢よく迎える。小さな店だが、10人ほど客がいた。

「あらアキラ君、いらっしやい。お待ちしてたわよ」

「どうも」

俺はカウンター席に座った。そして約束どおりナオトさんのボトルを降ろしてもらった。

「いらっしやいませ。本日ご指名のほうはございますか？」

ボーイがたずねる。

「タクヤ、いいのよ。私のお客様なの」

まゆみが言った。

「そうですね。それは失礼しました。ではごゆっくり」

「ありがとう」

ボーイが去っていった。

「こんばんは、まゆみさん。いいお店だね」

「ありがとう。今日はけっこうお客さん入ってるわ。平日のわりにはね」

「そうなんだ」

俺は笑顔だった。

「ねえ、よかつたら、私じゃなく若い子つけようか？」

「いやいや、俺はまゆみさんに会いに来たんだよ」

「まあ、かわいい」

「けど、まゆみさん、若いのにすごいね、お店を持つなんて」

「え？アキラ君、私を何歳だと思ってるの？」

「え？30歳くらいかな？」

「またまた、若いのにうまいわね。私もう37よ」

「ほんとに!？」

俺は驚いた。とてもそうは見えなかったからだ。肌もきれいだった。

「いやあ、ぜんぜん見えないよ。27って言っても分らないくらいだよ」

「またまた、かわいい顔してどこで覚えたの？そんなテクニク」

「いや、ほんとだつて。素直に思ってること言っただけだよ」

「分かったわ。ありがとう。うれしい」

まゆみは本当にうれしそうだった。

「アキラ君は22歳だったけ？」

「いえ、23です」

「23かあ。いいなあ…。私はあと3年で40よ。嫌になるわ」

「いやいや、まゆみさんは素敵ですよ。それに…俺は今無職ですよ」

「いいじゃない。事情があるんだし、仕事なんてすぐ見つかるわ」

「だといいですけどねえ」

二人の会話は続いた。

「…そうか、独身なんだ。けど、まゆみさんほど美人だったら、いつでも結婚できるでしょ？」

「…」

「あ、すいません。失礼なこと言っちゃいましたか？」

「うん、いいのよ。実はね…10年前結婚したんだけど、五年前に離婚したの」

「そ、そうなんですか？すいません」

「いいのよ。子供もいなかったし、若いころから自分のお店持ちたかったから、思い切って始めてみたの。離婚して半年後にね」

「へえ。すごいなあ」

「ほんとはね、喫茶店やりたかったんだけど、今は個人で喫茶店なんかやっても無理だからね」

「スターバックスとか、ああいう大手には勝てないって事？」

「そういうこと」

「けどすごいよ。自分のお店を持つのって。俺も見習わなきゃ」

「ありがとう。アキラ君ってかわいいわね」

「そ、そうかな」

「うん。私の初恋の人にちよつと似てる」

「ほんと？い、いや、照れるな…」

俺は照れた。正直、まゆみさんはタイプだった。大人で、かわいい一面もある。俺はだんだん行方不明の兄のことなど、どうでもよくなってきた。

その後も、楽しい時間は流れ、2時間ほどして帰ることにした。

「じゃあね、アキラ君。また来てね」

「うん。もちろん」

「じゃあ気をつけて帰ってね」

「うん。あの…まゆみさん」

「なあに？」

「まゆみさん…年下って興味ある？」

「え？」

「い、いや、なんでも…じゃ、じゃあね」

俺は足早に去った。さすがにいきなり告白は出来なかった。

ほろ酔い気分で、歩く星空の下。俺は本当に気分がよかった。

そんな時、ある男性二人に声をかけられた。

「なあ、にいちゃん、ちょっと聞いてくれよお」

二人はかなり酔っていた。歳は40代なかばくらいか。

「こいつさあ、しつこいんだよ。神様に祈り続ければきつといいことがあるってさあ」

「…」

「こいつこそ、バチあたりなんだ。神様なんていないってなあ」

「…」

変な二人に遭遇してしまった。

「俺は言っただったんだ。神様がいるなら、どうして戦争や犯罪がなくならないんだって」

「それはお前、いくら神様でも世の中全体には手が回らないからだよ」

「だってお前、神様だぞ？すごい力を持ってるんだろ？だったら戦争くらいなくせるだろう？」

「神様つつつても万能じゃないんだよ」

「…」

俺にはどうでもいい問題だった。

「なあ、だからあんたに聞きたいんだ？どう思う？」

「…」

俺はしばらく考えた。そして答えた。

「まあ…よく分かりませんが…仮に神様がいたとしても…人間なてどうでもいいって思ってるんじゃないですかね…」

「…」

二人は目を点にしていた。納得したのか、あきれたのか、それは分からない。

「じゃあ俺はこれで…」

俺は去っていった。その後も二人は討論していたようだったが、喧嘩をしていたわけじゃないし、とにかく俺には関係ない話だった。

「まゆみさん、きれいだったなあ……」
俺はそんなことばかり考えていた。

あれから一週間ほどが過ぎた。俺はまゆみさんの店に二回ほど飲みに行っていた。今度は自分でボトルを入れたりして。思い切って連絡先を聞いたら、教えてくれた。すぐくうれしかった。

ときどきメールをしたりもする。ただ、こっちからのメールの返事はくれるけど、向こうからメールが来ることはなかった。それでも俺は幸せだった。

酔った勢いで、まゆみさんみたいな人と結婚したいなあって言うたりもした。が、うまくはぐらかされた。やはり俺では駄目なのだろうか？

俺は最近職安に通っていた。一応、兄を探すつもりも（目的も）あったが、だんだん気持ちも変化していた。人の心は変わりやすいもの。良くも悪くも。

しかし……ある日。

ネットの中に俺への書き込みを見つけた。

”こんにちは。北条アキラ君。私は君の母の弟の市川ケンジという者だ。明日の夜、会えないか？”

「！……」

俺は驚いた。そして返事を書いてみた。

”情報があるんですか？”

しばらくして返事が来た。

”もちろんだ。会えるなら、明日の午後7時。レストラン・ホワイトブライトの前に来てくれ”

俺は少しだけ迷ったが、

”分かりました”

俺は了解した。確かに俺の母の旧姓は市川だ。しかし弟がいるなんて知らなかった。もしかしたら、嘘かもしれない。しかし俺はとりあえず行くことにした。

次の日。

俺は指示されたとおり、レストラン・ホワイトブライトの前に来ていた。

「さてと…」

しばらくしてスーツを着た男性が現れた。眼鏡をかけている。少し色つきの。ヒゲもかなり伸びている。そして首と左手首に包帯を巻いていた。

「やあ。アキラ君だね」

「あ…はじめまして。北条アキラです」

「すぐ分かったよ。真彦さんの面影があるし、ほくろもあるしな」
真彦とはアキラの父親の名前だ。

「あの…俺はあなたとお会いしたことはあるんでしょうか？」

「いや、むかし君を写真で見ただけだ。会ったことはない」

「そうですか」

「姉が亡くなったときも、仕事で遠くへ行っていてね。葬式に出れずにすまなかったな」

「いえ…」

しかしそんなことより、俺は包帯が気になった。

「あの…その包帯…」

「ああ。私は長距離トラックの運転手をしているんだが、荷物を積み降ろすときに、ちよっとね…」

「そうですか」

「大した怪我ではないが、一週間ほど休みをもらったんだ。ずっと働きづめだったし、ちょうどいいかと思ってね」

「そうですか」

「とりあえず食事でもしよう。おなか空いてるだろ？」

「ええ、まあ…」

俺はレストランに入った。

ここに来るのは初めてだった。存在は知っていたが入ったことは

なかった。

「おいしいですね」

「そうだね。私も一回しかきたことがないんだが、いい店だね」
俺は食事を美味しくいただいた。

「ごちそうさまでした」

「おなかいっぱいになったかい？」

「はい。ありがとうございます」

「コーヒーでも飲むか？」

「あ、そうですね。ではお言葉に甘えて」

しばらくしてコーヒーがふたつ運ばれてきた。コーヒーを飲みながら、会話が始まった。

「さて…君のお兄さんのことなんだが…」

「…」

「たまたま分かったことなんだが、トラック乗りの知り合いに聞いたところ、北斗運送で働いていることが分かったんだ」

「北斗運送…？」

「ああ」

「その会社は知りませんが…とにかく兄には首筋にほくろが二つあるんですが…」

「ああ…話によるとあるそうだ」

「…！」

「あまり自分のことは話したがらないそうだが、生き別れた弟がいるということも言っていたそうだ」

「それは…」

これは間違いなく兄か？俺は驚きを隠せなかった。

「まあ、まだ分からないが、君の兄さんである可能性は高いだろうな」

「…」

「しかし…」

「なんですか？」

「いや…こんなこと言うのもなんだが…いまさら会ってどうしよう
というんだ？」

「…」
「いや…もちろん生き別れた肉親だから会いたいというのも分かる
が…」

「そんなんじゃないですか」

「？」

「別に…いまさら会いたいわけじゃないんです」

「…？。なら、どうして…？」

「実は…」

「…」

「もしかしたら…母を殺したのは、兄かもしれないんです」

「…！」

ケンジは驚いているようだった。当然の反応だが。

「半年くらい前、母の日記を見つけました。そして母が死ぬ前日
の日記にはこう書かれていました」

”私は過去にとんでもないことをしてしまった。実の息子を…。明
日その息子に会う。もしかしたら殺されるかもしれない。けれど…
それでもかまわない。そうなったとしても、当然の報いだ”

「！？」

「過去に何があったか、俺は知りません。だから兄に聞きたいんで
す」

「そうか…」

「そして…」

「ん？」

「もし兄が母を殺したなら…」

「…」

「俺が兄を殺す…」

「アキラ君…！」

「いえ…前はそう考えていました。けど今は殺意はありません。真

実を知りたいだけです」

「そうか…」

少し重い空気が流れた。間もなくしてコーヒーも飲み終わり、二人は帰ることにした。

「それが北斗運送の連絡先だ。電話してみるといい」

「分かりました。ありがとうございます」

「アキラ君…後悔するようなことはするなよ」

「はい。分かってます」

二人は別れた。

「さて…」

俺は帰った。その日はなぜかぐっすり寝れた。自分の気持ちを言うことが出来たからか、かなり決定的な情報を得たからか、とにかくその日はぐっすり寝れた。

明日は、すべてのことが明らかになるだろうか…？

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2937m/>

ブラザークエスト その2

2010年10月8日14時30分発行